Kohtari's News Column

これは事件だ

vol.738

喫煙は悪か。弱者の憩いを、どこまで奪う気だ？

夜討ち朝寝のリポーター 神足裕司のニュースコラム

受動喫煙防止条例が波及か

各地の自治体で、受動喫煙による健康被害を防ぐための「受動喫煙防止条例」を制定、施行する動きが進んでいる。飲食店、宿泊施設などは面積に応じて禁煙・分煙、またはその努力義務を負い、違反した場合は罰則対象となる。だが全国で条例化された場合、3年間で4900億円の経済損失が見込まれるとの調査結果もあり、議論が続けられている

神 奈川県に続いて、兵庫県で受動喫煙防止条例が検討されている。千葉県流山市も、市町村としては全国初の同条例を議会に提出するそうだ。

タバコ喫みは、ますます肩身が狭くなって……。

という、軽い話ではない。

深刻な悩みが訴えられている。急激な変化への悩みだ。

「不幸とは急激な変化のことである」と言ったのは、元英首相・チャーチルだ。急な死や災害はもちろん不幸だが、良いはずのことも、あまりに急なら犠牲者を出す。

逆に、私の大好きな関西人の顔が思い浮かび、彼らが素直に従うわけもないと、少し笑えてきた。

当地の話を聞くため、新神戸行きの新幹線に乗ったら、車内の電光掲示板に禁煙補助剤「チャンピックス」で倒れた人が6人出たと、流れた。うち3人は自動車の運転中に意識を失い事故を起こした。が、何よりこの薬が年間41万4000人に使用されている。その数字に一番驚いた。

民族大移動が起きている。

新神戸駅から市営地下鉄に乗り換え伊川谷駅で降り、割烹『いり江』へ向かった。兵庫県飲食業生活衛生同業組合の理事長をされている、入江眞弘さんに会うためだ。

約束の時刻より早く着き、待つ間テーブルに「鯛めし」の写真付きメニューを見つけた。土鍋のご飯に鯛の頭が載った、うまそうな……。こんな手間のかかる料理を昼食メニューに用意する、関西の店の心意気が私は好きだ。

入江さんが語り始めた。第一回会合で「これは、いったい何の会議ですねん？」と、入江さんは驚いたという。

昨年6月。「兵庫県受動喫煙防止対策検討委員会」という名の会合なのに、どういうわけかWHO、世界保健機関のアメリカ人がいた。兵庫ではなく、北九州（産業医科大学産業生体科学研究所）から大和浩という教授が呼ばれていた。日本政府は'04年3月、WHOが作った「たばこの規制に関する世界保健機関枠組み条約」に署名した。"タバコは悪"と決定した機関だ。そのWHO研究センターのアメリカ人。そして大和教授は、タバコの大変な害について語る。それを入江さんは描写しながら笑う。

「たけしさんの番組にも出ている先生らしいですが、喫煙場所は遠くに作らないと意味がないと言う。それで、ベランダで吸っても、窓から粉じんが入る。窓を閉めても、サッシのすき間に、ほら粉じんがあると。んな、アホな」

兵庫県のHPへ行けば、委員会の、なぜか発言者の名前を伏せた「議事要旨」があり、要旨だけでかなり異常な言及だとわかる。

入江さんは野放図に喫煙を許す経営者ではない。店の入り口には「喫煙席」と「禁煙席」のステッカーが貼られている。世の流れが分煙、禁煙に進むなら、協力もやぶさかではなかった。

ところが、委員会のあまりに強硬な姿勢から「検討と言いますが、これは検討でなく、条例ありきではないですか」と抗議することに。

先に条例が成立・施行した神奈川県でも外食産業、入江さんと同じ飲食業、旅館ホテル業が打撃を受けた。そうでなくても、厳しい業界をユッケ事件や放射能牛肉問題が襲った。食の安全を守れなかったため業界に迷惑をかけた行政が、なぜ、そんなに急いで喫煙防止条例で我々を苛めるのか？

良き店と客を苛める法律に正義などない

そもそも、飲食店はさまざまだ。居酒屋が分煙になれば、喫煙者と非喫煙者が交じったグループは同席できない。小さな店ならそもそも分煙不可能だし、入江さんの店のように客席面積75㎡ギリギリの店は「禁煙義務」などと言われれば、多くの常連を失う。

「失礼な言い方やなと思ったのは、『おたくの業界では2割しか取り組めてませんな』と、県に言われた時です。2割しかじゃない。8割は取り組めないちっさな店です」

かつて居酒屋のワタミチェーンは、実験的に一部の店舗で全面禁煙を導入したことがある。だが、結果は惨敗。

入江さんが憤るのは、そうした飲食店の窮状を県へ訴えても、なかったかのように無視され、会議が進んでいったことだ。

「悪者が決まっていると、こうも物事は早く進むのかと」

筆者コータリは喫煙者だ。愛煙家と呼ばれるなら、そうなりたい。

神戸には素晴らしいバーがある。東門街の老舗へ久々に寄った。年を経た木の棚に世界の酒を取り揃え全身で「酒が好き」と訴える力ウンターで、バーテンダーに「神戸らしいのを」と注文したら、凍る寸前の角をトリプルに入れ、炭酸を注ぐ「神戸ハイボール」を出してくれた。

「3杯が、限界ですよ、これ」

「この店、禁煙にしろと言われたらどうする？」

「え！　それ、無理ですな」

入江さんもおっしゃっていたが、店が最も大切にするのは客だ。無農薬野菜や新鮮な魚を求めて、走り回る。お客のために。

その店が、分煙禁煙のご時世に対処しようとしないはずがない。

それに、嫌煙派はもう十分、勝利を収めているではないか。

学校、病院、官公庁などでは建物の片隅にあった喫煙所さえ取っ払われた。都会では歩きタバコもほとんど見かけない。

だから、私だってもはや喫煙の善悪を争おうなんて思わない。

だが、人の行為には歴史がある。大人になってタバコを吸うことに私は憧れた。格好いいポーズを練習した。学生寮でタバコを分け合い、もらい、もらわれ、小さな絆をつくった。そういう時代が確かにあり、私はその時代の人だ。

弱りつつある世代だ。

個人的には、長生きすることにも自分を若く保つことにも興味がない。人生は十分面白かった。

だから、どうかマナーを守って片隅にいる我々を、見逃してもらえないか。その弱者に優しい飲食店を、苛めないでもらえないか。世の流れになんとか対応しようとする彼らが、客を失い、身動き取れないようにする法律に、今さら何の正義があるのか。

健康、という言葉を私が憎むのはそれがわかっていても、そうできない人がいるからだ。働き、食うのに精一杯の人間が、憩いの時間に何をしようと許せないのか。

底辺の者からまだ奪うのか？

筆者コータリの愛する関西のネオン街。客に優しい店、店を愛する客。みんな努力している。これ以上、喫煙者を悪者にしてどうする？　条例にのっとって作成されたステッカー（小写真左）／条例の理不尽を説く入江氏（小写真右）

撮影／石川 徹